

主張 教材の現代化 山崎昌甫

『教材の現代化』『生活教育』第15巻第12号 1963年11月 p.7

教育が社会現象である限り、社会過程の変動が教育現象に影響を与えない筈はない。まして、学校教育は目的意識的な次世代の形成という課題を担っているのだから、社会の要求に無関心であることができないことはいくらまでもない。したがって、教育あるいは教材の現代化といっても、一方ではごく当然のこととして深く追求されずにいる反面、他方では「現代化」の問題性の真摯な把握をふまえて、この問題にせまろうとしている。前者の立場にたつ人々は、教材の現代化を、極端ないい方をすれば、現代化されたものを部分的にとり入れるという理解の仕方をしてている。しかし、後者の場合には、教材化の論理そのものの現代化「変革」という形でうけとめている。この立場をとることは深刻である。

近代国家における国民教育体系の制度化過程は、一面では次世代に対する継続的な政治対策が、目的意識的な教育意図という形をとって現代化したものであるといえよう。このような視点に立つとき、生活教育思想の系譜は、政治的教育意図に対する教育実践の立場からの批判の歴史であるといえる。この批判は、したがって、常に被支配民衆の子どもの学習意欲の掘りおこしを基軸とし、民衆自身の教育要求を起動力として、遂には民衆の発展の可能性の展望のうえにたつて、このような学習意欲や教育要求を歪曲し埋没させようとするイデオロギー支配と対決するに至っている。

ところで、さきの教育内容の刷新、改善と銘打っての学習指導要領の改訂、特設「道徳」、最近の家庭教育学級の新設にはじまる幼稚園教育課程の改革等は、進学競争、非行問題等とからんで、民衆の共感とうまく合致してだされてくる権力の巧妙なる教育政策の露骨なあらわれであり、これは別の見方をすれば、しつけ道徳を中心に、旧文化に固執しつつ、現代的なものを部分的にとり入れる形で、子どもの興味や要求とは無関係に、むしろその発展の可能性を阻害するような現代化の方法でもある。

こうして、生活教育のいうところの現代化は、上からの教育の中立性という美名のもとに打ちだされてくる、実は目的意識的な教育政策に対して、むしろ民衆の側の教育要求にこたえんとする、いうならば、現実の教育の変革をめざしているといつてよからう。そこで教材化の論理そのものの現代化「変革」をこにして、科学や芸術の成果を教材化していくという筋道をしっかりふまえていくことが教師の大事な仕事となってくるのであるが、さらにつつ込んで、この教材化の論理そのものの現代化「変革」を支えるものは何なのか、今一度その思想的根拠をたずねてみる必要がありはしないだろうか。